

道徳

ジャーナル

- 21世紀 心の時代に
心が動くと、人は動く
松村真宏…………… 1
- 道徳授業 私の実践
・「同じ」だけど「違う」を考える
中川裕子…………… 4
- ・中学生の「心の壁」を突破する
「動作化」の力
羽村麻美…………… 6
- 浅見先生に相談です！
自己の生き方について考えるには？
浅見哲也…………… 8
- どうなるこれからの道徳授業……………10

21世紀
心の時代に

心が動くと、

人は動く

行動の前にある「心の動き」

私が研究している「仕掛学^{しかけがく}」は、人の行動を命令や規則によって変えようとするのではなく、心が自然に動いた結果として行動が生まれる状況をデザインする学問です。人は「しなさい」と言われたから動くのではなく、「やってみよう」「面白そうだな」と感じたときに、自分の意思で行動します。

例えば、ごみ箱にバスケットゴールが付いていると、思わずごみを投げ入れたくくなります。消毒器が「真実の口」の形をしていると、つい手を入れてみたくくなります。いずれも小さな工夫ですが、人の中にある遊び心や好奇心に火をつけ、行動へとつなげています。

道徳で大切にされているのも、外から押しつけられた正しさではなく、自分の内側で納得した価値観

に基づいて行動することではないでしょうか。仕掛学は、その「内側の納得」が生まれる瞬間に注目しています。

正論では人は動かない、という気づき

「ごめん済んだら警察はいらん」とよく言われますが、同じように「正論で済んだら仕掛けはいらん」とも言えます。少し周囲を見渡すだけでも、さまざまな注意書きが目に入ります。もし、こうした注意書きに誰もが素直に従うのであれば、社会から問題はなくなっているはずですが、しかし、現実はそのようになっていません。

もちろん、多くの人は正論に従います。それでも、正論が行動につながらない人が一定数いるため問題はなくなるらないのです。言い換えれば、社会の問題の多くは正論だけでは動かない人の存在によつ



大阪大学大学院経済学研究科 教授

まつむらなおひろ
松村真宏

仕掛けによって戦略的に人の行動を変える日本発のフレームワーク「仕掛学」の提唱者。

て生じています。注意を向けるべき相手は、まさにその「正論が通じにくい人」なのですが、にもかかわらず私たちは正論だけで訴え続けてしまいます。ここに大きなミスマッチがあります。

このような経験から私が強く感じたのは、人は正しさそのものよりも、心が動いたときに行動するという事実です。そこで注目したのが、言葉ではなく、環境そのものが発するメッセージでした。形や配置、見え方を少し変えるだけで、人の受け取り方や振る舞いは大きく変わります。その積み重ねが仕掛学という研究分野につながっています。

「目的の二重性」という考え方

仕掛学では「目的の二重性」という考え方を大切に行っています。何か行動してほしいとき、その行動を直接お願いするのが正論ですが、仕掛学ではあえて正論とは別の目的を設定します。その別の目的を達成しようとした結果として、正論で伝えたかった行動が自然に生まれる——これが仕掛けのポイントです。別の目的に向かって行動しているため、当人にとっては「やらされている」という感覚はありません。したくなる別の目的を、どう設計するかが、仕掛けを考える際の重要な視点になります。

例えば、ごみのポイ捨てが多い場所に、みかんの木など目につきやすい樹種や、成長が早く毎日の水やりが欠かせない十五種類のハーブを植えたプラン



水やりができる花壇

ターを設置し、水入りのじょうろを置いたことがあります。近隣住民や通りがかりの人に水やりをしてもらうことで、植物の成長を身近に感じ、場所への愛着が生まれることを期待しました。

その結果、仕掛け設置前に捨てられていたごみの数は週平均二八・二個でしたが、設置後は週平均九・八個に減少しました。その場所を使う人たちが愛着を感じるようになったことが心を動かし、ごみを捨てる行為をためらわたのだと考えています。

遊びが生んだ集中力

中学生の頃、私は個人で運営している地元の塾に

通っていました。授業は、先生の説明の後に問題プリントが配られ、その場で解くという形式でした。早く解き終えた生徒は、特に注意されることもなく自由に過ごしてよい雰囲気がありました。

私は隣の席の友達とできるだけ早く問題を解き終え、余った時間で五目並べをするのが密かな楽しみでした。少しでも長く五目並べをするために、先生の説明は聞き逃さないよう自然と集中して聞いていました。今振り返ると、遊びたいという気持ちが学習への集中力を引き出していたのだと思います。

ここで重要なのは、私は「勉強しよう」と思って集中していたわけではないという点です。目的はあくまで五目並べでした。しかし、その楽しみを得るためには、先生の話を理解し、問題を正確に早く解く必要がありました。その結果として、学習に真剣に向き合う行動が自然に生まれていたのです。

遊びが生んだ「場」とつながり

大学院生の頃にもよく似た経験がありました。私は大学の向かいにあるマンションの一室を研究室の分室として使っており、そこに自分の机がありました。あるとき、その分室に所属する学生の一人がどこからか麻雀マージャンの全自動卓を持ち込んできました。当時、麻雀が好きな学生は多く、夜になると自然と分室に人が集まるようになりました。ただし、麻雀は同時に四人しか参加できません。そこで、半荘ハンプウ（一

回の試合)が終わるごとに最下位の人が席を外し、待っている人と交代するというルールが自然と定着しました。その結果、研究室には常に誰かがいる、にぎやかな空間が生まれていました。

麻雀そのもの以上に、興味深かったのは、その場で交わされる会話でした。麻雀をしながら研究の進捗や悩み、行き詰まっている点について気軽に話すことができました。公式のミーティングでは口にしにくい相談も自然と共有され、そのことが研究を進める助けになっていたように思います。

振り返ってみると、麻雀は単なる遊びではなく、人が集まり、関係がゆるやかにつながる「場」を生み出す仕掛けとして機能していました。その結果として、研究に向き合う時間や質も高まっていったのではないのでしょうか。

「遊び≡不真面目」という思い込み

学校や大人の世界では、「遊び」と「学び」はしばしば対立するものとして扱われます。遊んでいるときは不真面目で、学んでいるときは真剣である、という暗黙の前提が存在します。しかし、私の経験はその単純な二分法が必ずしも正しくないことを示しています。

子どもは、決められた環境の中でも自分なりの楽しさを見つけて出す達人です。そこには、与えられた状況を読み取り、意味を再構成する力があります。

遊びは学びから逃げる行為ではなく、学びに向かうためのエネルギー源になり得るのです。しかし、大人になるにつれて私たちは「寄り道をしないこと」「無駄を省くこと」を良しとするようになります。その結果、効率や正解ばかりが重視され、遊び心や好奇心はいつの間にか抑え込まれてしまいます。

心が動くとき、人は主体的になる

仕掛学は、こうした人の心の動きに注目する学問です。人は正しさを教えられたときよりも「やってみたい」「面白そうだ」と感じたときに主体的に行動するという前提に立っています。五目並べの話もまさにその一例です。私は誰かに勉強を強制されたわけでも、遊ぶことを許されたわけでもありません。ただ、環境の中に「早く終われば自由に過ごせる」という余白がありました。その余白が遊び心を刺激し、学習行動を引き出していたのです。ここで重要なのは、外からの命令や評価ではなく、自分の内側で意味付けが行われていたという点です。仕掛学が目指しているのもまさにこの状態です。

道徳科で掲げられている「真理の探究」、創造」は、正解を覚えることではありません。自分なりの問いを持ち、考え、試し、納得しながら行動していく姿勢を育てることです。その出発点にあるのは、「なぜだろう」「こうしたらどうなるのだろう」という素朴な疑問です。これは遊び心と表裏一体のもの

です。遊びを通して試し、失敗し、工夫する経験こそが、真理を探究する態度を形づくります。遊びを排除した学びは、形式だけをなぞるものになります。一方で、遊び心が許された環境では、子どもは自分の頭で考え、自分の行動に責任を持つようになります。

先生方へ——遊びを許す勇氣

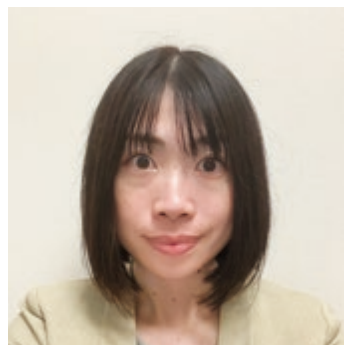
先生方にお伝えしたいのは、子どもたちの中にある遊び心を、どうか敵視しないでほしいということです。遊びは集中を妨げるものではなく、集中や主体性を生み出す入口になることがあります。もちろん、何でも自由にすればよいわけではありません。しかし、少しの余白や選択の自由があるだけで、子どもたちは自分なりの意味を見つけ、自ら動き始めます。そのとき子どもは、指示に従っているのではなく、自分で考え、自分で選び、自分の行動に責任を持つようになっているのです。

仕掛学は、子どもを変えるための学問ではありません。環境をほんの少し工夫することで、子どもがもともと持っている力が、自然に表に現れるようにする学問です。心が動いたとき、人は初めて主体的になります。道徳で育てたい心もまた、そのような「内側から動き出す経験」の中でこそ、確かなものとして育っていくのではないのでしょうか。

(まつむら なおひろ)

道徳授業 私の実践

鳥取県八頭町立
郡家東小学校教諭
中川裕子



えり子が劇に向かう姿勢の変容を考
えることを通して、集団の一員として
自分の役割を自覚し、責任を果たそう
とする心情を育てる。

【導入】

集団生活について、児童がイメージ
することを発表した。

・何かを一緒にする。

・同じところで活動する。

・学校や寮生活が集団生活。

さまざまな意見が出てくる中で、集
団生活に対して「楽しい」という意見
と、「心配、苦手」という、相反する
意見が出てきた。

意見が出てきた。

子どもたちは、どちらの気持ちも分
かると話した。楽しいこともあるけれ
ど、自分が思うようにいかないことが
往々にしてあるというジレンマを話し
た。そこで、よりよい集団生活を送る
ために、大切なことは何かを考えてい
くことになった。そのヒントが見つか
れば、自分たちがよりよい集団になる
かもしれないと考え、集団生活を送る
ために大切なことを見つけることを本
時のテーマとし、共に考えた。

【展開】

T…主人公のえり子さんは集団生活の

「同じ」だけど
「違う」を考える

はじめに

「道徳の授業は好きですか。」

こう問われたら、子どもたちは何と
答えるだろう。私が子どもの頃に同じ
質問をされたら「好きです。」と答え
たはずだ。

この「好き」の理由は、教材そのも
のに魅せられていたのだと思う。主人
公の境遇や行動に心打たれ、教科書
(当時は副読本)には載っていない結
末が気になり、図書館で本を借りたこ
ともあった。今思えば、これは単にス

トリーの結果を追い求めているだけ
で、道徳の授業で自分の考えを深めた
とは言えない。教壇に立つようにな
り、道徳の授業で大切にすべきことは
何かと、考えるようになった。

道徳の授業で、私が大切にしている
ことは、「子どもと共に考えること」
である。教材が持つ力は大きい。だが
からこそ、そのストーリーに心打たれて
終わるのではなく、教材を基に、今日
は何を考えるのかを、教師と子どもが
「共通の課題」として共に考え、共に
学ぶ授業を展開したい。教師自身も、
子どもたちの発言から発見したり、学

授業について

んだりすることが多くある。「教える」
のではなく「共に学ぶ」ことを大切
に、日々の授業に向かっている。

○主題名

よりよい集団になるためには

○内容項目

よりよい学校生活、集団生活の充実

○教材名

「森の絵」(『新版 みんなの道徳5』

学研)

○ねらい



中で何か変わった？

C: 変わった。

T: はじめのえり子さんと、あとのえり子さんでは違うんだ。はじめのえり子さんとあとのえり子さんでは、どっちが好き？

C: あとのえり子さん。

T: 何で？

C: はじめは自分の希望した役になれなくて、いやな気持ちで絵をかいていたけれど、あとのえり子さんは劇のために頑張って絵をかいたから。

T: 何でえり子さんは頑張って絵をかきことができたの？

C: 本当は裁縫が好きじゃないけれど、頑張っている文男さんの姿を見たから。

C: はじめは希望した女王の役になれなくて、絵をかくことに投げやりだったけれど、文男さんの姿を見て、劇のために頑張ろうと思ったから。

T: 投げやりな気持ちでも、頑張ろうという気持ちでも絵はかけるよね。どっちの気持ちでかいても絵が完成するくらいいいんじゃない？

C: よくない。

C: 投げやりな気持ちでかいた絵と、

頑張ろうと思ってかいた絵は、同じ絵でも違う。

T: 何が違うの？

C: 投げやりな気持ちでかいたら、本当に自分のかきたい絵ではないけれど、みんなのために絵をかく仕事を頑張ろうと思ってかいたから、あつと驚く絵になった。

T: えり子さんははじめに希望していた女王役になれていたなら、いちばんいい劇が作れただろうね。

C: うん。それも違うと思う。苦手でも頑張る文男さんの姿を知ったから、えり子さんも劇に向かう気持ちが変わった。

このように、子どもたちは同じ森の絵でも、どのような心持ちでかくかによって、絵に違いが生まれると話し始めた。また、同じ集団の友達から学び成長することができることも学んだ。そして終末では、集団の中で自分の役割をしっかりと果たすことで、よりよい結果につながったり、友達の姿から自分自身が成長できたりするのではないかと考えることができた。

【振り返り】

「自分があまりしたくない役に決ま

ったとしても、その役には責任があるから、しっかりとていねいにした方がいいなと思いました。いやな役だったとしても、適当にする劇と、ていねいに取り組む劇では、全く違うと思います。ていねいにすることは、他人の驚きにもつながると思います。クラスの劇はみんなで作るものだから、一人一人が自分の仕事に責任を持ち、ていねいに取り組めば、本当のクラスの劇になるはずですよ。」

このように、同じ絵だとしても、込められた心の違いを考えることを通して、集団生活の中で、自分の役割に向きな気持ちで取り組むことの重要性について考えることができた。

終わりに

「道徳の授業は好きですか。」

教師になった今、こう問われたら、やっぱり「好きです。」と答えるだろう。しかし、同じ好きでも、道徳の授業へ向かう気持ちは、昔とは異なる。

子どもたちや周りの人と共に考えることで、自分一人では見ることができない世界の広がり気付くことができ

るからだ。

また、一見同じように見える行為でも、どのような心で向かっているのかという質の違いに注目することで、より考えを深めることができる。

子どもと共に思考を働かせることは、教師自身の学びにもつながっていくと、日々実感している。



(なかがわ ゆうこ)

道徳授業私の実践

中学生の「心の壁」を突破する「動作化」の力

「動作化」で心を動かす

道徳科の授業において「生徒を主役にするにはどうすればいいか」と悩み、試行錯誤の中で一年目に挑戦したのが「動作化」を取り入れた授業です。あの時、生徒たちの表情がパッと明るくなった手応えは、今も私の授業づくりの原動力になっています。

中学生は、道徳的価値をどこか「他人事」として冷めた視点で捉えがちです。私はまず体を動かすことで心の壁を突破したいと考えました。

本稿では、第三学年で実践した「礼儀って」と、第一学年で取り組んだ「挨拶しますか、しませんか」の二つの授業事例を通して、「動作化」がもたらす教育的効果について考察します。

三年生を対象とした本授業では、柔道などの武道における「ガッツポーズ」の是非を切り口に、礼儀の本質について考えました。中学生は、挨拶や言葉遣いといった「形」としての礼儀は身に付けていても、それが本当に相手への敬意に基づいているのか、単なる「虚礼」になっていないかという課題があります。本授業における最大の

ねらいは、礼儀を「押し付けられたルール」としてではなく、場に応じた自らの心情を整えて表す「自律した態度」へと昇華させることでした。そのため具体的な手立てとして、授業の導入と終末に「動作化」を組み込みました。まず導入において、「試合で勝ってガッツポーズをした後の礼」を生徒に演じさせました。この段階では、多くの生徒が「勝った喜び」という自然な感情のままに動作を行います。その後、パリ2024オリンピックでの阿部詩選手の涙など、具体的な事例も交えながら、「自然な感情の発露」と



弘前大学教育学部
附属中学校教諭
羽村麻美



「相手への敬意や社会生活上のルールとしての礼儀」の葛藤について多面的・多角的に議論を深めました。議論を経た授業の終末、再び同じ場面の「動作化」を行いました。すると生徒たちの動作に明らかな変化が現れました。ガッツポーズを忘れるほど礼儀を重んじるような姿勢になったのです。

演じた生徒は、自分の努力だけでなく、ライバル、指導者、支えてくれた

家族など「背景にいる人々」への感謝を意識することで、礼の重みが変わったと語りました。周囲で見ている生徒たちも、「これならガッツポーズされても相手へ敬意を払っている感じがする。」「自分のためにも相手のためにも、そして背景にいる人にも礼を払っている感じが伝わった。不快な思いにならなかつた。」と述べ、最初の礼と最後の礼の「質の違い」に気付き、礼儀の裏側にある「相手を含む周囲の人を尊重する心」「自分を律する心」の重要性を肌で感じ取っていました。

「動作化」による気づき

続いて、第一学年で行った「挨拶しますか、しませんか」の実践について紹介します。一年生は小学校からの延長線上で「挨拶はよいことだ」という知識は持っていますが、思春期に入り、気恥ずかしさや相手との距離感から、実際の行動に迷いが生じ始める時期でもあります。本授業では、街中ですれ違ふ際や、近隣住民に会った際など、中学生が日常で直面する「挨拶すべきか迷う場面」を動作化しました。

相手の反応（無視された場合、笑顔で返された場合など）をいくつかパターン化して演じ分けました。一年生の実践においては、「動作化」によって「挨拶をしない側の不安」だけでなく「挨拶をされた側の心の動き」が可視化されたことが大きな効果でした。山登りの挨拶の場面で「挨拶したけれど、声が小さくて届かない」「流れ作業のように心を込めていない挨拶」という動作を客観的に見ることで、生徒たちは「挨拶は自己満足ではなく、相手に届いて初めて成立するコミュニケーションである。」という本質に気づき始めました。また、そのような挨拶をされた側の気持ちを聞いてみると「適当に扱われている感じがして、挨拶されないほうがまだいい。」と述べました。見ている側は「先生たちが何人も並んでいる時に、自分も流れ作業で挨拶していた気がする。」といった感想を述べました。頭での理解（知識）を実生活の行動へと結び付ける橋渡しとして、「動作化」が機能したのです。

さらに、挨拶を禁じられたマンションの住人になって廊下やエレベーター

内で鉢合わせした場合についても演じてもらいました。すると、それまで「挨拶いらない派」だった生徒も「気まずかった。」「ぎこちなくて、嫌な感じがした。」とつまづき言語化できなくなりました。最後に、挨拶が持つ力について議論しました。すると、「挨拶はするほうもされるほうも気持ちよくなれる」「人と関わるための第一歩で、コミュニケーションが円滑になる」などの意見が出た後、クラス全体で「分かった！ 挨拶は結局平和を生む！」といった結論になりました。

もともと元気で活発なクラスではありましたが、授業後は、号令時も目線や姿勢がさらによくなったり、クラスメート同士での挨拶を積極的に行ったりするなど、挨拶の質が上がったように感じています。

二つの実践を通して

改めて「動作化」は道徳的価値の多面的・多角的な思考を促すために、後述のような、大きな効果があると考えます。

①議論するだけでは感じ取れない体の感覚からくる本音を引き出すことができる。

②「変化」を感じ取りやすい。演じる側は「最初はなんとなく動いていたけれど、今は細かい指先まで意識を向けた」。見ている側は「さつきより礼が深くなった」「顔つきが変わった」など視覚的な気づきを促す。

③役割演技よりもシンプルに表現できるので、生徒の抵抗感が少ない。動作に注目させるので、論点がズレにくく、その後の対話もしやすい。

今後の課題は、授業内で深めたこれらの気づきを、いかに教室の外——生徒たちの実生活での実践へとつなげていくかです。道徳の授業は、授業時間の中だけでは完結しません。生徒が日常のふとした瞬間に、授業での「あの時の感覚」を思い出し、自律的な判断に基づいて行動を選択できる。そんな「実践的な道徳性」を育むために、これからも生徒一人一人が「輝く」授業づくりに挑戦し続けたいです。

(はむら あさみ)

浅見先生に 相談です!

第7回



十文字学園女子大学教授

浅見哲也

自己の生き方について考えるには？

教材を活用する意味と、教材を離れるときの工夫をおさえましょう。



マンガ・春原弥生



自己を見つめるとは

道徳科の目標には「自己を見つめる」という言葉が出てきます。これは道徳科の学習の特徴の一つであり、読み物等の教材を活用したとしても、登場人物の心情理解に終始することなく、登場人物に自分を重ねて考えるということです。つまり、気持ちや考えの根拠が主に文章表現にあるのが国語科だとするならば、道徳科はその根拠が主に自分自身の経験ということになります。

では、道徳科であえて読み物等の教材を活用するのはなぜなのでしょう。子どもたちの直接的な体験を話題にすると、相手との関係などから、本音で心の内を表出することに抵抗を感じる場合があります。そこで、教材を話題にすることによって間接的に考えられるようにし、自分の素直な気持ちや考えを表出しやすくしているのです。しかも、教材を活用すると、誰もが同じ土俵に立って話し合いに参加できるという利点もあります。

このような道徳科の特徴や教材活用の意味を理解しないで授業を行うと、自分事ではなく登場人物事、つまり他人事で考える、いわゆる「読み取り道徳」になってしまいます。道徳科では「自我関与」という言葉がよく使われますが、これは、ある事柄を自分のもの、あるいは自分に関係があるものとして意識するということです。教材を活用しながら自我関

与するための工夫は、本連載の第5回（『道徳ジャーナル』127号）をご参照ください。

教材と日常生活の境目を工夫する

道徳科の指導では、一般的に授業の最後まで教材を活用するのではなく、授業の後半、いわゆる「展開後段」や「終末」の段階で教材から離れることが行われます。それは、学んだ道徳的価値を教材の世界だけにとどめることなく、自分のこれからの生き方に取り入れて、よりよく生きていこうとする意欲を高めたり、汎用的に考えたりできるようにするためです。だからこそ、授業の後半で教材から日常生活にどのようにつないでいくのか、ここに工夫が必要になります。

冒頭で国語科と道徳科の違いや教材活用の意味について触れました。「展開」の段階で子どもたちは教材という土俵で話し合っています。教材を活用する中でも常に自我関与して考えていきます。これが十分でないと、いざ教材から離れて自分の生活や生き方を見つめるときに大きなギャップが生じてしまいます。そこで、自己の生き方についての考えを深めるために、その境目に着目して二つの工夫を取り上げたいと思います。

まず一つ目が、授業の後半で教材から日常生活へつなぐ、教材の出口の工夫です。「展開」の段階においても「終末」に向かつていくにつれて教材から

離れていく意識を持つことが大切です。教材から離れていくというのは教材を活用しなくなるということではありません。教材を活用することのでつくられた道徳的価値に向かう流れを利用しながら、その話題をいつまでも登場人物が置かれている状況で考えるのではなく、子どもにとって一般的な状況に置き換えていくということです。登場人物に自分を重ねて心情を考えることから始まった思考を、ねらいとする道徳的価値そのものへの思考に転換していくということです。

例えば「友情、信頼」について考える『絵葉書と切手』という教材があります。「展開」では、「ひろ子はお兄ちゃんとお母さんの言葉を聞いて、どう思ったのでしょうか」と発問をします。この後「友情、信頼」についてより深く考えていきますが、「ひろ子は何を大切にしたいと考えたのでしょうか」という登場人物を主語にした発問にこだわることなく、「友達だからこそ大切にしたいことは何でしょうか」などと発問を切り替えることで、教材から離れ、道徳的価値そのものを考える方向へと転換していくことができます。

二つ目は、教材から日常生活へつなぐ、日常生活の入り口の工夫です。ここが多くの先生方の悩みどころかもしれません。自己の生き方について、本時で学んだ道徳的価値を、自分事として受け止めて考えるにはどうすればよいかという点です。

ここでは、教師が子どもたちにどのような言葉を

投げかけるのが重要なポイントになります。かつての私は「今日の授業で気付いたことや考えたことを書きましょう」と投げかけて、自由に表現できるようにしていました。しかし、自由だけにねらいに向かうものではなかったり、教材から抜け切れていなかったりすることもよく見られました。教師の指導の力量が試される振り返り方だったと思います。今は教師の明確な指示によって振り返ることの必要性も感じていきます。

先に例で取り上げた『絵葉書と切手』でしたら「友達とどんな関係を大切にしたいですか」という振り返りではやや抽象的であり、導入で出た子どもたちの意識との変化はあまり見られないかもしれません。「友達だからこそ、相手を信じて、勇気を持って言ったことやしたことはありますか」と聞いたほうが、この授業のねらいに沿って、できたりできなかったりしたときの経験を振り返ることができると思います。場合によっては、このような経験がない子どももいるので、そのときは、これからの心構えを考えていきましょう。

「滑らかな接続」という言葉は、保幼小中の接続でよく使われる言葉です。常に自分との関わりで考えることとあわせて、教材と日常生活の接続の工夫についても考えてみるとよいと思います。

（あさみ てつや）

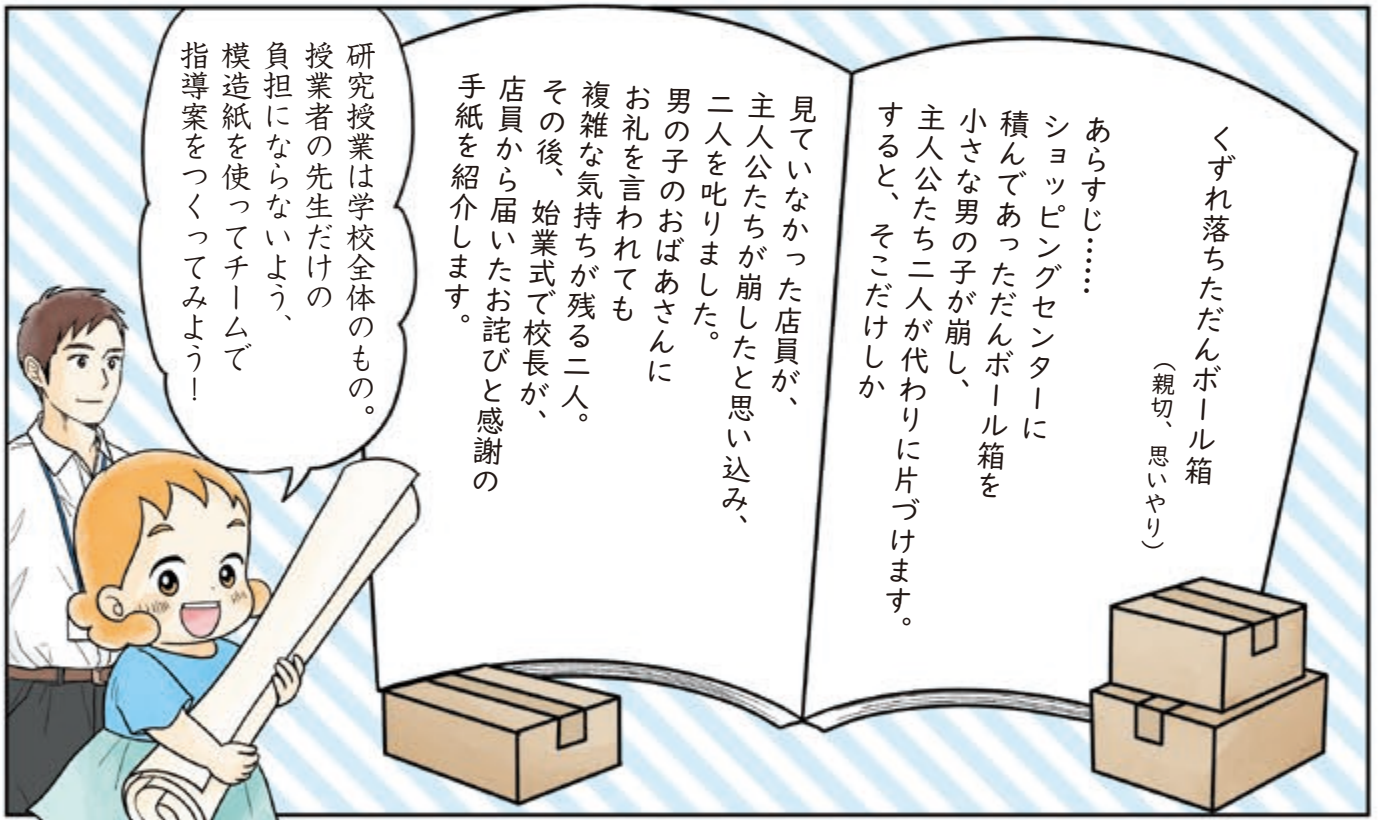
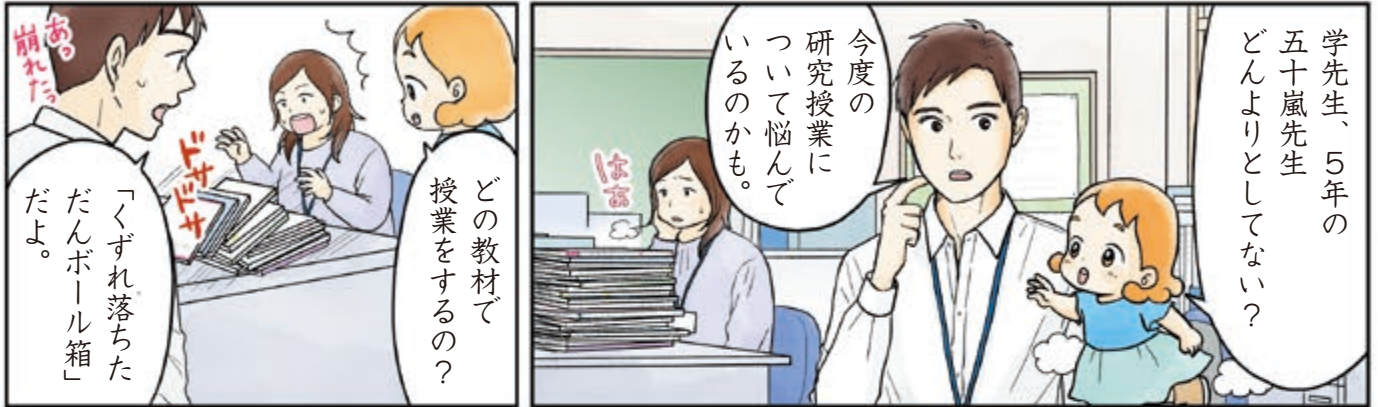
どうなるこれからの道徳授業

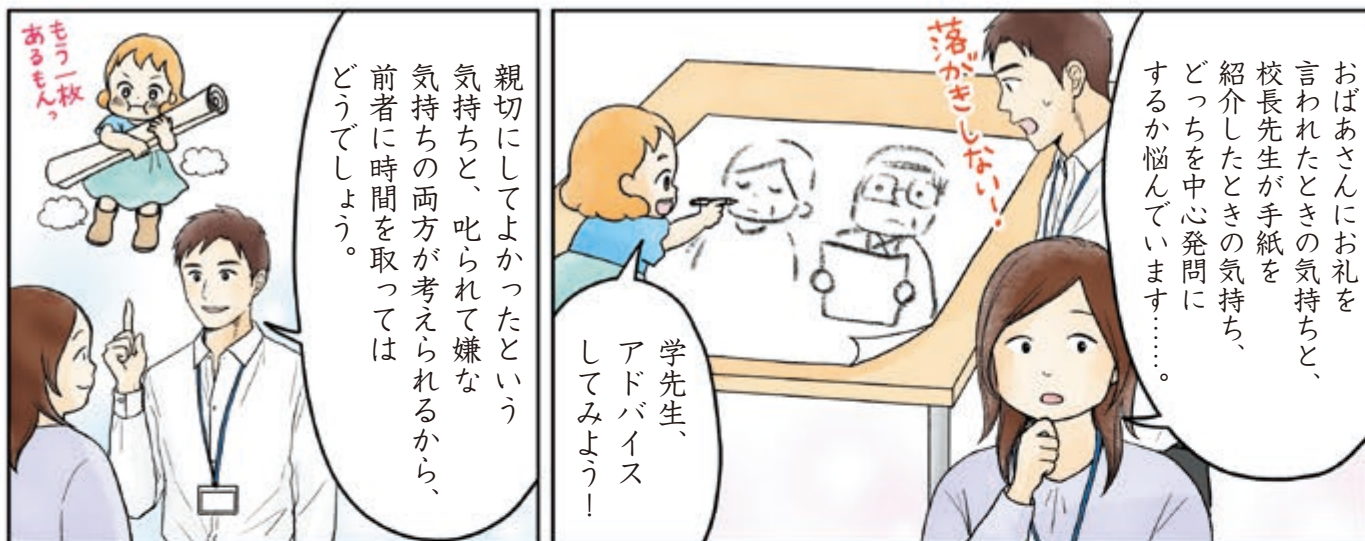
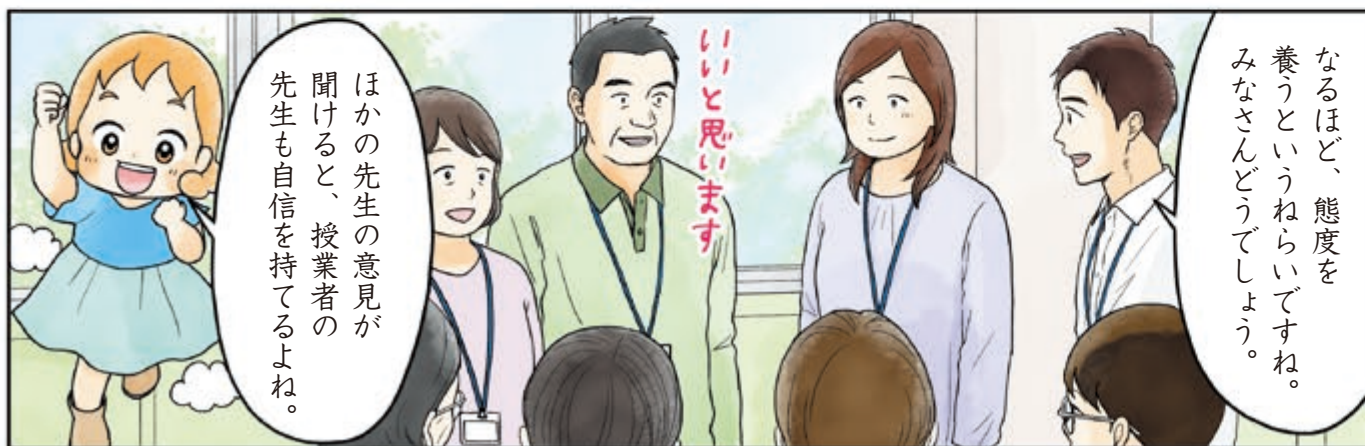
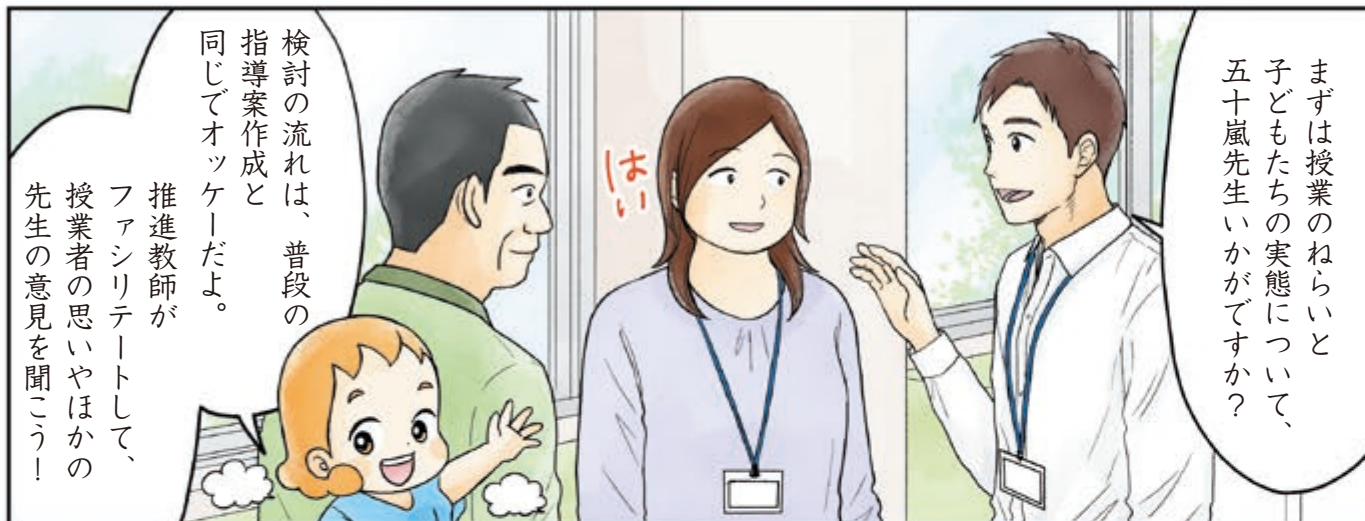
道徳教育推進教師編 その5

とくちゃん

監修・廣瀬仁郎 元法政大学兼任講師
マンガ・のはらあこ

学先生





『どうなるこれからの道徳授業』が本になりました!!

マンガでわかる道徳

すぐできる ずっと役立つ **基礎・基本**

編著

廣瀬仁郎 (元法政大学兼任講師)
浅見哲也 (十文字学園女子大学教授)
永田繁雄 (東京学芸大学特命教授)



A5判・144ページ 定価：1,980円 (本体1,800円+税10%)
品目コード：2380252900 ISBN：978-4-05-802529-1
ご注文は貴校担当のGakken 特約販売代理店へお願いいたします。全国の書店、ネット書店でもご購入いただけます。

商品
ページは
こちら!



道徳ジャーナル129号 令和8年5月発行

発行所 株式会社Gakken 発行人 竹重純二 編集人 木村昌弘
本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8
内容については…TEL (03) 6431-1565 (編集) それ以外のことは…TEL (03) 6431-1151 (販売)
「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/> ●「道徳ジャーナル」のPDF版はWEBページから。



9300010773